

## 授業と読書をリンクする： アメリカの大学の授業

中里見，敬  
九州大学大学院言語文化研究院：助教授：中国文学

<http://hdl.handle.net/2324/6499>

---

出版情報：千字文. 18, pp.1-1, 2002-12-07. 福岡大学人文学部東アジア地域言語学科  
バージョン：  
権利関係：



# 千字文

18号(2002/12/7)

## □ 他者の目

授業と読書をリンクする-アメリカの大学の授業- 九州大学助教授 中里見 敬

ラジオの英語講座を聴いていて、次のようなセリフにぶつかりました。“Suffering is one of the things that the university has to offer.”（苦しみは大学が与えるものの一つだ。）これを聴いて、私はアメリカの大学で課題として出される読書とレポートのことを思いました。アメリカでは授業のためにどのくらい本を読む（読まされる）のでしょうか。私の留学経験からお話ししましょう。

私が出た「古典中国文学」という学部生向けの授業では、上下二巻で合計1000ページほどの教科書と、もう一冊副読本が購入指定となっていました。これを2セメスター、すなわち30週かけて読み通します。学部の授業はたいてい月・水・金曜日に60分ずつ行われます（または火・木曜に90分ずつ）。それ以外に、随時参考書が紹介され、さらにコースパックと呼ばれる複数の本から一部分をコピーしたパッケージが販売されます（コピー代理店が出版社に著作権料を支払うのでけっこう高い）。したがって、毎時間の授業のために30ページ程度の読書が課せられ、一週間では100ページにもなります。そして、授業の冒頭には必ず読んだ部分に対する小テストが行われていました。こうしてこの科目では、第一セメスターでは古代から唐まで、第二セメスターでは宋から清末までの文学を、英訳された多くの作品に触れながら学べるようになっていました。

このようにアメリカの大学の授業はどれも、規則正しい読書の習慣と授業が一体となって、1学期でその分野の体系的な知識が身につけられるように設計されています。こうした読書量は基本的にどの科目でも同じですから、一つの学期に履修できる科目数はせいぜい3つか4つまでとなります。

こうした授業を支えているのが学術書の出版です。日本では採算面で出版不可能と思われる、質量ともに充実した教科書、また良質な翻訳や専門書が多く刊行されています。日本の大学のように、学生は必ずしも本を読まなくても（買わなくても）卒業できれば、学術書の市場が成立しないことは明らかでしょう。ついでにいえば、このような確固とした知識の体系があるからこそ、フェミニズム、ポストコロニアリズム、構築主義といった知を問い直す思潮がきわめて現実的な意味合いを帯びるわけです。

私たちが学生の活字離れを嘆く前に、授業と読書を結びつける手だてを本気で考えなければならぬときがきているようです。